

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一13:8~13 「愛は決して絶えることがない」

[8]「愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます」

草はしおれ、花は散る。しかしこの愛は決して変わらず、絶えることがない。この愛の永遠性は他の賜物と比べてみる時にいっそうはっきりする。まだ新約聖書が完結していない時代には、どうしても神のみことばを宣べ伝え、教え励ますという「預言の賜物」が必要だった。しかし、神のみことばが聖書として整っていったときにこの賜物はすたれた。クリスチャンは聖書そのものにより頼むことができるようになった。また「異言」もやんだ。初代教会以後の教会教父や監督たちの手紙や著書には異言については何も語られていない。また「知識」もすたれる。どれだけ聖書的知識があり、この世的知識があったとしてもやがて世の終わりの時に再臨される主イエス・キリストの前ではもはやそれは古び、色あせ、すたれたものとなる。

[9-10]「というのは、私たちの知っているところは、一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現れたら、不完全なものはすたれます」

やがて私たちが神の国に入り、永遠のいのちを持ち、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもなく、また、夜もなく、太陽の光もいらず、主ご自身の栄光が都を照らす（黙示録21:4, 23）という世界になる時、本当に完全なものを知ることになる。その時、不完全なものはすたれるのである。

[11]「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました」

パウロはこのように言うことによって、コリント教会の人々が過度に異言や知識を重んじ、愛を軽視していることを気づかせようとする。たとえ彼らがどれだけ誇ろうとも、それは子どもの状態である。彼らはもう子どもではなく、大人にならなければならない。→ヘブル5:12~14

[12]「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせてみることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります」

当時の鏡は今と違って、鉄や銅や石を磨いたもので、ぼんやりと姿が映る程度の非常に粗末なものであった。しかし、やがて主イエス・キリストの再臨の時には、私たちはぼんやりとではなく、キリストご自身と顔と顔とを合わせて見、私たちが完全に知られているのと同様にこのお方を完全に知ようになる。→Iヨハネ3:2

[13]「こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」

神との交わりを中心こそ信仰、希望、愛である。ではなぜその中で一番すぐれているのは愛であると強調されているのか。それはすでに13:7節で愛はすべてを信じ(信仰)、すべてを期待し(希望)と、愛こそが信仰と希望の源であることが教えられ

ているからであろう。信仰と希望は愛から出てくるのである。また信仰と希望はどちらかと言えば人間的な美德であるが、愛こそは神にふさわしく、神ご自身の本質である。→ I ヨハネ4:7~8,16

私たちも自分に与えられている賜物が何であるかをよく知り、その賜物を最善に生かす道としての愛を追い求めなければならない。そのようにしてお互いに仕え合い教会を立て上げ、地の塩、世の光としての役割を果たしていくことが大切である。